

ウォーリック大学短期研修プログラムの教育的意義

小嶋 英夫*

Pedagogical Implications of a Short Course Program at the University of Warwick

Hideo KOJIMA

要旨 今日、大学の国際化が共通認識となり、グローバル人材育成教育が課題となっていることもあり、日本の各高等教育機関では、短期・中期・長期の目的・形態の異なる海外研修プログラムが存在している。本稿の目的は、文教大学教育学部と英国ウォーリック大学応用言語学センターとの間で新しく共同開発された短期研修プログラムについて、その教育的意義を考察することである。2017年度春休み期間中に実施した3週間のパイロット・プログラムに参加した22名の学生を対象に、プログラム立案者並びに引率者の立場から、帰国後に意識調査を行い量的・質的データをまとめ、本研究による研修中の観察、受け入れ先のディレクターからのレポートなどを含めて総合的に分析した。その結果、参加者たちのポジティブな姿勢に支えられ、改善点はあるものの総じてプラス効果が認められた。今後ともプログラム開発を継続し、より教育効果の高いものへと進化させる必要がある。

キーワード：ウォーリック大学短期研修 英語指導者志望生 意識調査 教育的意義

1. はじめに

我が国の高等教育機関においては、国のグローバル化対応策と連動して、海外からの留学生を増やし、日本人学生を海外に送り出すことを奨励する傾向が見られる。留学に関する関心の高まりは、近年若年層にも及んでいるが、官民協同の留学支援制度「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム高校生コース」の募集などで機運が高まっているようだ。また、文部科学省が2013年12月に初等中等教育段階からのグローバル化に対応した教育環境づくりを目指して、小・中・高を通じた英語教育改革の実施計画を発表して以来、教師の留学も増えつつあると言われている(石澤, 2018)。

これに反して、昨今の大学生は「内向き」志向を示していると指摘され、国際共通語としての英

語能力の欠如、家庭の経済事情の悪化も重なり、長期的な海外留学熱が期待通りには高まらないとの声もよく聞かれる。あえて海外で苦勞しなくても、国内での安全で豊かな生活の中で博士までの学位取得や就職が可能とすれば、かつて日本人に見られたハングリー精神も消えてきているように感じられる。入学の条件として海外留学が義務づけられている学部の学生は別として、その他の学生の意識を高揚させるためには、単に語学能力向上のためのみならず、相互文化的市民性の形成、国際レベルでの専門性の育成などをねらいとした内容上の刷新も課題となっている。

一般に教育学部の学生が最もグローバル化に疎く、海外留学志向が低いという声を聞くことが多い。日本の教員養成課程と海外留学の相性が悪く、留学に前向きな学生がほとんど見られない(上杉, 2008)。また、某大学教育学部の学生を調査した結果、「在学中に旅行・観光を含む国外渡航を考

* こじま ひでお 文教大学教育学部学校教育課程英語専修

えているか」という問いに対して、積極的に肯定した回答は7%であるという(百合田・香川, 2016)。これは日本に限ったことではなく、国際的な傾向と思われるが、それなりの理由がありそうだ。

想定される主な理由は以下の通りである。

- 1) 大学卒業後に地元の教育委員会に採用されることを第1希望とする多くの者にとって、英語教員志望生は別として、留学体験は一般に合格を左右する主要条件ではない。
- 2) 教育学部のカリキュラムが過密化しており、学外での実習も学年を追って増え続ける中で、留学を前向きに考えるだけの精神的・時間的余裕がない。
- 3) 安定した就職に就くことを意識した教育学部生の家庭における経済事情は、一般に高所得とは言えず、学生の生活は奨学金やアルバイトによって支えられていて、留学費用の捻出が困難な場合が多い。

上記のような留学を阻む要因が考えられる一方で、岩田(2018)が指摘するように、日本の公立学校においては日本語を母語としない児童・生徒が増えつつあり、教師自身がグローバルな知見と実践的指導力を必要とされてきている。さらには、このような子どもたちに日本語を第二言語として教える教育の重要性が認識されつつあると思われる。

文教大学教育学部に、2016年4月から英語専修が設置され、第1期生が現在3年生になっている。グローバル時代を意識して、社会に開かれた学習指導要領が2020年から実施されるが、育むべき資質・能力が、これまでの教科の知識・技能中心ではなくなる。このことは技能教科とも言われ、英語知識と統合的言語スキルによるコミュニケーション能力の向上を目標にしてきた英語教員は、とりわけ意識の変革を問われることになる。子どもたちの知識・技能を活用した思考力・判断力・表現力、さらに生涯学習につながる学びに向

かう力、グローバル社会において異質な集団との協働性や相互文化的市民性を合わせ持つ人間性を育成できる英語教員を生み出すために、大学の英語教員養成も改善が求められている。

加えて、小学校高学年に英語が教科として入り、これまでの外国語活動は中学年の3・4年生が対象となる。小・中・高を通じた系統的な英語教育の基礎段階を担う小学校では、数少ない英語専科教員だけに依存できない現状がある。そこで、今後の小学校教員養成課程においては、外国語の指導法、外国語に関する専門的事項を学ぶことが求められ、一般に英語を苦手とする傾向の強い小学校教員の英語能力の向上も問われることになる。

英語教育改革における小・中・高の教育事情への対応策として、文教大学教育学部に誕生した海外研修プログラムがウォーリック大学短期研修である。本研究では、研修の目的、プログラム内容、パイロット実施に際しての授業観察、参加者の意識調査、受け入れ先ディレクターのレポートなどに基づき、プログラムの教育的意義について考察する。

2. 研修の目的と内容

(1) 目的

ウォーリック大学応用言語学センターでのアカデミックなプログラムを通して、参加者の英語知識・技能、異文化理解能力、英語指導能力を統合的に磨き、専門的資質・能力を高めること、またキャンパス内外での多様な体験・活動を通して、時代を生きる力となる人間力を総合的に育むことを目的とする。

(2) 授業内容

本プログラムは、相互に関連し合う①英語知識・技能、②異文化理解、③英語ティーチングを主軸にして構成され、日本語の通訳なしで行われる。実際、英語教育分野で国際的な実践経験を有する10数名の教員による講義・ワークショップが、個人・協働学習、メディア活用を配慮しながら、毎週月曜日から金曜日の午前・午後にかけて展開

する。プログラムには地域の学校での授業参観・実践や文化施設の訪問も含まれる。さらに、参加者はイギリスでの体験に基づき日・英文化比較の視点からテーマを決め、センター内の機器・情報源を活用してリサーチ・プロジェクトを行い、その成果を小論文にまとめ発表し合う。指導者の下で学びを深化させ、一人ひとりの理解度と進捗度が評価され、フィードバックが施される。

<授業担当教員>

ウォーリック大学応用言語学センター教員
ゲスト・ティーチャー

<評価>

ウォーリック大学から各参加学生に対して修了証明書が発行される。学生評価に際しては、授業担当教員のみならず同行の引率教員も学生一人ひとりの授業・活動への態度・姿勢を継続的に観察し、センター内の担当者と協議する。

<ホームステイ>

現地滞在中はホームステイをすることになっており、授業終了後も大学近隣の滞在先で日常的に英語コミュニケーション、異文化理解などを体験する機会を持つことができる。

3. 参加者に対する意識調査

ウォーリック大学応用言語学センターでの研修直後に、参加者全員（英語専修2年16名、理科専修2年1名、英語専修1年5名）を対象に意識調査を行った。回答者は計21名であった。

<質問項目1>

本研修の目的は、参加者が将来優れた英語指導者になるために、英語知識・スキル、異文化理解力、英語指導力を統合的に磨き専門的資質・能力を高めるとともに、時代を生きる力となる人間力を育むことです。この観点から、今回参加してみてプログラムに関する満足度は全体的にどの程度

ですか。5段階で評価し、理由も書いてください。（5: 大変満足 4: 満足 3: 普通 2: やや不満足 1: 不満足）

<質問項目2>

プログラム中の授業担当者について、それぞれの専門分野に関わる授業に対する満足度は全体的にどの程度ですか。5段階で評価し、理由も書いてください。その際、特に印象に残った授業へのコメントを含めてください。（5: 大変満足 4: 満足 3: 普通 2: やや不満足 1: 不満足）

<質問項目3>

今回の学校訪問、すなわち4グループに分かれてストーリー・テリングを実践した小学校訪問、英国の教育に関する講話及びスペイン人の教員志望者と交流した小学校訪問に対する満足度は全体的にどの程度ですか。5段階で評価し、理由も書いてください。（5: 大変満足 4: 満足 3: 普通 2: やや不満足 1: 不満足）

<質問項目4>

プログラム中と週末の文化訪問に対する満足度は全体的にどの程度ですか。5段階で評価し、理由も書いてください。その際、特に印象に残った訪問へのコメントを含めてください。（5: 大変満足 4: 満足 3: 普通 2: やや不満足 1: 不満足）

<質問項目5>

英国滞在中のホームステイに対する満足度は全体的にどの程度ですか。5段階で評価し、理由も書いてください。（5: 大変満足 4: 満足 3: 普通 2: やや不満足 1: 不満足）

<質問項目6>

本研修に参加する場合、自己体験から判断すると大学4年間のどの時期がより効果的と考えますか。理由も書いてください。

参加時期：(回答例 大学1年の春休み, 各個人の考え次第)

<質問項目7>

本研修への参加を通して、自分が学びを深め成長できたと感じる点、また研修体験を今後どのように生かしていきたいかを書いてください。

4. 結果と分析

上記質問項目の1～5に関しては、下記のように5段階評価でまとめられる。質問項目3の平均値が3.7でやや低めであるが、ほかの項目はいずれも4.1～4.2で、「大変満足」・「満足」と回答した参加者が多かった。その量的データを裏づける質的データとして、参加者から寄せられた理由をまとめ分析する。

質問項目1～5の5段階評価

	5	4	3	2	1	M
1.	6	11	4	0	0	4.1
2.	7	12	1	1	0	4.2
3.	5	7	7	1	1	3.7
4.	10	7	3	0	1	4.2
5.	12	5	2	1	1	4.2

Note. N=21 M=Mean

5: 大変満足 4: 満足 3: 普通 2: やや不満足 1: 不満足

質問項目1～5の理由については、以下のよう
に要約される。

<質問項目1> プログラムの全体的印象

- 語学学校とは異なり、英語教授法・異文化理解に関する授業がかなり充実していた。
- 授業では協働学習が多く、英語で話す機会もたくさんあった。
- 大学での授業、学外の文化訪問、現地の小学校訪問、ホームステイなど、3週間を通して充実した日々を送ることができた。費用以上のプログラム内容であった。
- 日本では聞いたことのない話題や情報、あるいは英語指導法を、経験豊かな講師陣か

ら教えていただいた。

- 3週間大学に通いながら英国で暮らすことで、英語コミュニケーション能力のみならず、時代を生きる日本人としての力も育むことができた。
- 様々な教授法を学ぶ中で、自分の教育に関する考え方や児童・生徒に対する考え方が深まった。
- 充実したレベルの高い内容でとても勉強になったと感じた一方で、期間中に出た宿題や課題に対応する場合、自分の英語力や知識不足のために悔しい思いをした。もっと事前の勉強が必要と思う。
- 英国の特徴の一つとされるように、天気が不安定で雪がかなり降った日に大学が休講になった。学外での活動もあり体調管理が大切と思われた。

<分析>

本プログラムは、語学学校のように参加者の英語力の向上のみに焦点を当てたものではない。文教大の要求に応じて内容を組み立てるテーラーメイドと称されるものである。参加者が教育学部生でかつ英語専修生を中心とすることから、英語指導者養成に資するという条件がつけられた。よって、英語教授法・異文化理解に関する授業が多いのもうなずける。英語圏の大学を舞台とする授業なので、使用言語は全て英語のみで日本語の通訳はない。個人発表・グループ討議も原則英語で行うので、日本語中心の通常の形態とは大きく異なり、英語で話す機会がたくさんあるのも当然である。短期集中型の本プログラムは、日本の大学よりも1週間分の中身が濃厚で、学外での全体活動や週末の個人活動も含めると、費用以上の内容であると感じた人がいたのも理解できる。

講師陣に恵まれたことは、プログラムの成功を左右する最大の要因の一つであろう。一部の若手講師を除けばベテランと呼ばれるタイプの教授経験の豊かな方々がほとんどで、日本人学生の心的

状態を理解しようと努め、声かけをしながらグループ活動中心の授業をうまくリードしてくれた。本研究者も毎回同席するので授業を観察されているという意識も作用したであろう。時に本研究者がサポーター・協力者になることもあり、余計なプレッシャーを与えないように配慮した。

異国での留学では、授業以外での現地の人との交流も大切で、日本人としてのアイデンティティ、時代を生きる人間としての自分のあり方を考える好機である。自分の人間としての実力、教育観・子ども観の未熟さも感知させられる。課題・宿題を出す講師もいて、英語で考え書く力が鍛えられるが、不慣れな学生は悩むところでもある。2週目の後半に全ヨーロッパを襲った寒波のために、1日休講になりロンドンへの日帰り旅行が翌日にずれ込んでしまった。予定通りにいかないことがあってもストレスとせず臨機応変に対応できることが体調管理面からも求められた。

<質問項目 2> 授業担当者

- 英語教育・英国文化についての授業が興味深く貴重な時間となった。
- 英語教授法に加えプレゼン用の新しいツールを教えてもらえてよかった。
- 音声学に関する授業が日本とは異なる視点が感じられ学びが深まった。
- ICT活用やアカデミック・ライティングの授業は、役に立つ内容で大変印象深かった。
- それぞれの分野に精通している先生ばかりでとても勉強になった。
- 授業担当者数が予想以上に多く、発音・アクセントも異なり、多様な英語を聞くことができてよかった。
- 英国で実際に使用されているアプローチを直接学ぶことができたのでよかった。
- 英語学習者・指導者の両者の立場を考えながら学ぶことが多かった。
- それぞれの授業担当者がこちらの理解度を

確認しながら丁寧に教えてくれた。

- 英文学など興味ある分野を学ぶことができた。
- ユニークな先生が多く授業が充実していて楽しかった。
- 英文学の授業に慣れておらず難しく感じた。
- 講義中心的な授業は実践的な授業よりもきつかった。

<分析>

授業担当者については、こちらの予想を超えて10数名の講師陣が関わり、多くのクラスでグループ活動を活用した形態で教えてくれた。英語教育の専門分野をほぼ全てカバーするのみならず、英国の教師教育に特徴的なWebサイトやプレゼン用の新ツールの紹介などが含まれ、学生の専門意識の高揚に効果的だったと思われる。PhDコースに在籍中のベテラン英語教員による音声学の授業、応用言語学センターの修士・博士コースの担当者によるアカデミック・ライティングや最終プレゼンテーションの指導も好評であった。加えて、特別講義で早期外国語教育分野の専門家から、学校訪問時の活動に直接つながるストーリー・テリングを実演してもらった。そのおかげで参加学生は要領を理解でき、英国の小学校で気持ちを込めて実践できたのは幸いであった。

一方、学生の興味・関心の有無によって内容に対する評価が分かれたのが英文学の授業だった。伝統的な講義調の傾向が強かったこともあり、文学にあまり興味のない男子学生からの評価が低かったが、大方の女子学生からは人気があった。学生時代に英文学に親しんだ本研究者からすれば、授業内容の深さが感じられ違和感はなく、かつて学位取得のために英国の大学院コースで受講したクラスに似たムードが感じられた。これも講師側の授業スタイルの好みであろうが、一般に今日の英国では、学び中心で参加型の授業スタイルが主流と思われる。協働学習が頻繁に採用されて

いたのは、これからの日本で期待されるアクティブ・ラーニング型の授業形式を先取りしていると言えそうだ。

<質問項目3> 学校訪問

- 外国の学校訪問は初めての人が多く、とてもよい機会となった。
- スペイン人の教員志望者とお互いの国のことを教え合うことができてよかった。
- 最初の小学校訪問で、日本の昔話を題材にしてストーリー・テリングを実践できてよかった。子どもたちの反応もよかった。
- 小学校の子どもたちと接する機会が多くあり、積極的に問いかけてくれる児童が多く楽しかった。
- 英国の教育体制、授業内容、学校の雰囲気などについて学ぶことができた。
- 耳の聞こえない子どもたちが、手話を使いながら歌を伝えていたのがとても印象深かった。
- スペイン人の教員志望者との交流は、もう少し少人数同士でやればよかった。
- World Book Day というイベントの日だったので、お祭り状態だった。通常の授業が見たかった。
- 訪問校によって受け入れ体制に差があり、当たり外れがあると感じた。
- ストーリー・テリングについて、事前の準備時間がもっと欲しかった。

<分析>

学校訪問は2度行われた。1度目は4グループに分かれてそれぞれ大学近隣の異なる小学校を訪れ、World Book Dayの一環として日本の昔話をストーリー・テリングのやり方で子どもたちに紹介した。訪問直前での準備が大変だったが、それぞれのグループで協力し合い、ナレーターを先導役にして映像・身振りを交えて上演にこぎつけた。校長との会談、授業見学なども各校の事情に合わ

せて行った。学校によって受け入れ体制に差があり、日本人学生としての感覚からすれば、当たり外れがあると感じたのもなるほどと思われる。

2度目は全員同じ学校に出向き、校長から英国の初等教育を中心に教育制度について講話を聞き、その後グループに分かれスペイン人の教員志望生たちと交流・会談した。同世代の教員志望者として、異文化間コミュニケーションにはうってつけの機会となり、大変印象深く記憶に残ったようだ。できれば、キャンパス内で同様のチャンスが持てれば、参加学生の専門意識や英語能力の向上に効果的であったろうと推察される。

英国の中等教育を理解するためには、小学校にこだわらない発想と参加学生のより積極的な姿勢が求められる。さらに、訪問校に関する情報や活動内容について事前に情報が入手できれば、日本での教材準備も可能であったろう。どうにか協働的に準備を済ませ本番に臨んだ参加学生の中に、時間的に余裕がなかったと感じる者がいたのも理解できる。

<質問項目4> 文化訪問

- 文化訪問では歴史のある場所を訪れ、全体的に楽しく肌で異文化を感じることができた。
- 週末は自分たちで計画を立て、チケットを手配して希望地を訪れることができたので満足できた。
- 文化訪問があったから授業も頑張れたと思う。
- 大変な授業の中でよい息抜きになった。
- 地下鉄やバスに乗ったり、人に道を聞いたたりして苦労したが、見知らぬ土地での対応能力を育むことができた。
- 時間的に短いので、もっと下調べをしていけばよかった。
- 文化訪問の際に、現地で過ごす時間配分をもっと考えるべきと思う。レポート準備前は余裕がなかったので今後考慮してほしい。

<分析>

プログラム内外で行われた文化訪問は、大学の授業での緊張感をほぐし、直接的に肌で異文化を味わうことに寄与したと言えそうだ。引率者の下で受け身的に訪問するよりは、下調べをしたり、自分で列車のチケットを購入したり、ホテルの予約をして出かける方が、積極的な姿勢を見せた分最後に苦勞が報われ達成感や思い出がより強化される。見知らぬ土地で思わぬトラブルに巻き込まれた学生たちは、その問題解決に向けて協力し合い仲間意識もより深まったようだ。

週末のグループ行動計画に基づく文化訪問は、協働を通して自律を育むプロセスを自己体験できたとすれば、授業に匹敵するよい経験となったはずである。引率者の本研究者は、ホテルに待機しグループ行動の成り行きをチェックする立場にあった。この任務は決して楽ではないが、英国訪問が初めての学生たちが無事で満足感を得られたと知って、こちらの苦勞も報われた思いである。プログラム内で企画された訪問に関しては、時間配分や場所の組み合わせを再考し、時間帯の無駄がないように配慮する必要がありそうだ。

<質問項目 5> ホームステイ

- ホストファミリーはとてもよい人たちで、何不自由なく時間を過ごすことができたのでよかったと思う。
- 自分のつたない英語をしっかりと聞き取り、週末の自由行動に要する電車のチケットの予約方法も教えてくれたので満足している。
- 温かく迎えていただき、Wifi 完備、風呂・トイレも清潔で、食事もおいしかった。
- 生活環境が整っていたことはもちろんながら、積極的に英語を話す機会を作ってくれた。
- おいしい食事を作ってもらい、英国文化を教えてもらった。割り当てられたかわいらしい部屋を去るのが名残惜しいくらい楽しい生活だった。
- 言葉では言い表せないほど親切で温かいご

夫婦で、感謝してもしきれない。二人に出会えて本当によかった。

- ホームステイを通して異文化理解能力やコミュニケーション能力を磨くことができたと思う。勉強以外の話題で英語を話す経験が持ててよかった。
- 英語で話すこと、英語が通じることの大切さを学んだ。漠然と「世界共通語」として思っていた英語を見直す好機になった。
- 一人での滞在を希望したが、他の日本人と一緒に他大学の日本人もいて期待外れだった。
- 人柄は悪くないが、他のホストファミリーと比べるとよくなかった。朝は自炊で夜の食事も不満だった。

<分析>

本プログラムについて、企画する上で最も気になったことの一つがホームステイである。事前の調査では、寮生活を希望する者もいたが、時期的に学生寮を使用できず、またホームステイによる教育的効果を期待する意図から、参加者全員が近隣のお世話になることになった。

アンケートの結果を見ると、一つの家庭を除けば好印象であったことが窺われる。その理由は以下のようにまとめられる。

- 1) 健康状態を維持する上で大事な食事・睡眠・入浴・洗濯などが保障された。
- 2) 大学での授業とは異なる環境で英語でのコミュニケーションを日常的に体験できた。
- 3) 英国人の家庭生活を通して異文化理解を深めることができた。
- 4) 週末の小旅行を成功させるために必要な交通機関やホテルなどに関する情報・アドバイスを、親身になって提供してくれた。
- 5) これまで海外からの学生を受け入れてきた体験から、日本人学生を迎える姿勢・態度が総じてよかった。

残念ながら評価が低いホストファミリーが一つ

だけあった。初めてホストとなった独身のキャリアウーマン宅で、日本人学生が不満に思うことが表面化したことにより評価が低かったと推察される。これについては滞在した学生から確認を取った後、受け入れ大学に事情を率直に説明した。その結果、理解が得られ次年度のホストファミリーのリストから削除することになった。

<質問項目6> プログラムへの効果的な参加時期

参加時期： 大学1年春5名
 大学2年春11名・夏3名
 個人の考え方次第1名
 できるだけ早い時期1名

<分析>

今回の参加者が研修後に感じた効果的な参加時期は、大学2年の春が半数を占めたが、1年の春が5名と続いた。寒さ・雪の心配を考えると夏休みの利用もありうるが、交通費の加算、引率者の学会参加などと不都合な点もあるので春休み実施となった経緯がある。大学3・4年次は、合宿・教育実習・教員採用試験などの教育学部に特徴的な要因が歯止めをかけて参加を困難にしている。

プログラムの難易度からして、英語科教育法を習う2年次終了の春休みがより適しているという印象を持った学生も少なくない。文教大のカリキュラムを変えることはほぼ無理だが、1学年末に参加する学生を考慮して、英語専修所属の教員側が研修に役立つ授業内容を配慮することは可能である。年度毎の参加希望生に応じて、専修教員が協働的に対応を工夫する必要がある。

<質問項目7> 学びを深め成長できた点と今後への生かし方

- 自分の目や耳で実際に見たり聞いたりして、直接体験的に英国と日本の教育・文化の違いを知ることができた。また、常に英語で授業や活動を行うため、英語力も身についたと思う。今後の授業実践で、今回学

んだ副教材を選ぶ基準やICT関連の知識を活用していきたい。

- 英語母語話者と英語で日常的にコミュニケーションができたことで自信が付き、英語を話すことにためらいがなくなり、もっと英語力を高めたいという気持ちがわいた。異文化理解力が高められたので、今後これを模擬授業に取り入れたり、コミュニケーション活動に生かしていきたい。
- 週末のロンドン旅行などで見た英国人の政治に対する態度、英国人のアメリカ化などが興味深く感じられた。今後は観察する内容や視点を変えてより実像に迫りたい。
- 英国の教授法・アプローチを専門分野の多様な先生から学べてよかった。一人で電車やバスに乗る場面もあり、自律的に行動できるようになった。この研修体験を将来教育の現場に立った時に積極的に生かしたい。
- 英語でのコミュニケーションに馴れてきて、リスニング力が伸びたと実感できる。文化の異なる人々と出会い関わることの大切さや彼らの温かさを実感した。今後は自分の日常生活や将来の教職に生かしたい。
- ホームステイ先で自分から話題をふったり、分からないことを調べたりして自主性が身についたと思う。授業や生活全体を通して視野が広がり、もっと色々な知識を増やしたいという意欲がわいた。英語力のなさを実感したので、育んだ自主性を生かして積極的に勉強したい。
- ペアワークやグループワーク、ICTを大いに活用した授業を体験し抵抗がなくなった。また、小学校訪問を通して、授業のみならず学校それ自体の持つ機能などについても考えるきっかけになった。日本の従来やり方にこだわらず、よかれと思ったことは自主的に取り入れていきたい。
- 自分の意見を持ちそれを英語で発信する場

面が何度もあり、英語を話すことに関しては前よりも抵抗が少なくなった。英語教育については日本で学んだ内容の再理解ができた。今後は多くの人の前で自分の意見を発信する力や英語指導法を役立てていきたい。

- 自分が当たり前だと思っていたことが実はそうではなかったり、自分と異なる文化や価値観があることを肌で感じた。今後は、このような気づきをもっと高め、多角的に視野を広げたい。
- この研修で英語という言語の特徴、英語を専門的に学ぶ自分自身について、認識を新たにすることができた。これから大学での授業にしっかり取り組み、英語力を高めてできるだけ海外に出かけて学びたいと思う。
- 授業方法や活動の多様性、児童・生徒の学習スタイルの違いを知り、教育に対する考えが深まった。個々の子どもたちの能動的な授業参加を支援できる指導者となるために、学びを継続し優れた教授法を見出したい。

<分析>

実は本プログラムが現地でスタートした時点から、ウォーリック大学関係者が文教からの参加学生をほめる言葉をよく耳にした。学生たちの日頃の授業・生活態度をそれなりに理解している本研究者としては、お世辞に過ぎないであろうと半信半疑で受け止めたが、質問項目7への回答内容を見ると、それなりに学生たちの意識の高さが窺われる。日本では自他への甘えが見られ生活行動が気になる学生も、異国の地では本人なりに考え状況判断をしながら行動していたように感じる。3週間の短期研修とはいえども、英語だけでコミュニケーションをすると覚悟を決め、朝から夕方までの集中的な授業、異文化訪問、学校訪問、週末の自主計画による小旅行、そして毎日のホームス

テイが、相乗効果的に作用して諸々の点で学びを深め成長できたと感じたのであろうと推察される。

参加者の省察から以下のことが読み取れる。

- 1) 英国の地で授業やホームステイなどを通してオーセンティックな英語コミュニケーションが日常的にできたことで、発信型の英語力が鍛えられたと感じ、さらに高めたいという内的動機づけが高まった。
- 2) 英語教育のベテラン講師の下で、多様な教授法やアプローチに触れ、教材の開発、ICTの活用、協働学習の実践などを体験的に学び、4年次の教育実習や将来的な現場教育に生かしたいという意欲がわいた。
- 3) 学校訪問やホームステイ、週末の小旅行などを通して、日・英の教育観・文化観・社会観・言語観・価値観などの違いを肌で感じ、今後は視野を広げ、観察力を鋭くし、物事の実像を把握できるように努め、それらを英語授業にも生かそうとする積極性が身についた。

特に帰国後の4月から3年生になった学生については、英語の外部検定試験で目標点を達成したり、教職への取り組みに真剣さが見られるなどの変化が全員に認められる。大学生としての生活が緩みがちな2学年目の最後に渡英したことで、生活態度が良い方向に軌道修正され、3学年生としての自律的成長につながるメタ認知能力が高まったのかもしれない。

5. ディレクターの総括的レポート

現地でお世話になったプログラム・ディレクターの Penny Mosavian から、文教大生の研修態度や活動内容などに関する総括的レポートが、共同開発者である本研究者に届けられた。その中の Course Evaluation and Reflections に関する最終段落を以下に紹介する。

Overall credit has to be given, though, to this group of students. While their feedback was highly

complimentary of the course, it should also be noted that it was undoubtedly their enthusiasm and commitment that made the delivery of teaching an absolute pleasure for all of the Bunkyo Teaching Team, and this has been reflected in the staff feedback for the course. The trainees embraced every learning opportunity with commitment and focus, good humour and talent; they worked hard in class tasks, formed good collaborative groups, and solidly handled a challenging programme that aimed to deliver a wide range of teaching and language concepts in a fairly short space of time. They also handled the inclemency of the British weather (the worst snow fall in several years) with humour and common sense. The group has also laid solid, positive foundations for future cohorts from Bunkyo University. We wish them all well and every success with their future studies.

上記の文面によれば、文教大からの参加者たちが、プログラム開始から終了までユーモアと良識を持って協働的に挑戦し、熱心に献身的にあらゆる活動に取り組んだこと、またプログラム継続のための基盤を固めてくれたことを称賛するコメントが読み取れる。2週目の週末に欧州全体が凍るような悪天候のためにプログラムを修正したりしたが、これにも臨機応変に対応できたことがよい印象を与えたようだ。引率者の学生観察からしても、日本で見せる甘い生活感覚がほぼなくなり、自己責任の下で目的意識を持って行動できるようになったように見受けられ、異国の地での苦勞が成長への糧となったように感じられる。

6. 研修プログラムの教育的意義とまとめ

本研究では、英国での短期研修プログラムを終えて帰国した直後に参加学生を対象として行った意識調査結果を主たるデータとし、研修中の授業観察やディレクターからのレポートなどを併せて総合的に分析した。今後プログラムを継続する立場からすれば改善すべき点は色々あるが、全体と

しては予想以上のプラス効果が認められたことは幸いであった。

本プログラムの教育的意義は、下記のようにまとめられる。

- 1) プログラムの目的、すなわち参加者の英語知識・技能、異文化理解能力、英語指導能力を統合的に磨き専門的資質・能力を高めること、またキャンパス内外での多様な体験・活動を通して、時代を生きる力となる人間力を育むことへの主体的挑戦が、参加学生の英語力の向上と専門的・人間的成長を統合的に促す。
- 2) 英語指導者養成プログラムとして明確な特徴を持つことで、単なる語学研修とは異なる内容、異なる講師陣の存在が、参加者のプライドを刺激し、専門意識の高揚をもたらし、将来の教職につながる学びの深化と成長をもたらす。
- 3) 文教大学での事前の学びを背景知識として、経験豊かで専門性の高い講師陣による魅力的な英語授業を体験することで、教え手と学び手が互恵的に成長し合う精神・姿勢が磨かれる。
- 4) 英国での大学授業・学校訪問・文化訪問・家庭滞在を通して、言語を介したコミュニケーションの重要性に気づき、多角的な視点から物事を考え、批判的思考力と論理的表現力が養われる(勝又, 2017)。
- 5) 日本を離れて異文化の人間を理解し、日本人としての誇りと威厳を持つことの大切さを認識することで、グローバル社会に生きる人間として多文化・複文化を理解し自律的・協働的に成長しようとする意識を高める。
- 6) 英語指導者志望生が、本研修のような海外留学を通して優れた経験をすることは、卒業後の教育現場での授業実践方法・内容に大きな変化をもたらし、子どもたちの言語観・文化観・人間観・世界観などにも影響を与える。

上記のような教育的意義を踏まえて教育学部生

全体に開かれた本研修であるが、プログラムの改善に向けて考えるべきことは多い。パイロット・プログラムへの参加者の実態からすれば、英語専修生 21 名に対して他専修（理科）1 名のみであったことは、プログラムの継続に関わる今後の課題である。また、研修に参加したい気持ちはあっても家庭の経済事情からできないという学生の声も耳にしている。教育学部生を対象とする海外研修としては、あまり例のない挑戦的なプログラムであるだけに、学部教員全体の理解や意識統一をより深める必要がある。これは準備のための授業の保証や参加者の単位認定とからむ重要な問題である。さらには、本プログラムに関心を寄せる他学部の英語教員も少なくない。いずれは学部の枠を超えてプログラムを開き、毎年の参加学生、現地で英語を使って直接交渉ができる引率教員の確保を配慮することも考えられるであろう。いずれにしても、小・中・高の現場で英語教育改革をリードし英語教育の未来を拓くことができる人材養成を念頭に置いて、諸々の問題を解決しながらより充実したプログラムへと進化させることが求められる。

引用・参考文献

- 石澤京子（2018）「留学白書」が映し出す留学状況の変化『英語教育』Vol. 67 No. 7 pp. 34-35 大修館書店。
- 岩田康之（2018）日本の教員養成系大学における短期海外研修プログラムの企画・実践・効果に関する考察—教職志望者の視野を外に開くカリキュラムづくり—『日本教師教育学会年報』第 27 号 pp. 134-144.
- 上杉嘉見（2008）教師教育の国際化：教員養成大学における留学政策の現在 東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター編『東アジアの教師はどう育つか：韓国・中国・台湾と日本の教育実習と教員研修』pp. 159-174 東京学芸大学出版会。
- 勝又美智雄（2017）『最強の英語学習法：グローバル人材を育てる実践的英語教育』IBC パブリッシング株式会社。
- 百合田真樹人・香川奈緒美（2016）教員養成課程のグローバル化の実践と評価『日本教育大学協会研究年報』第 34 集 pp. 153-166.